

## ポール・クロードルの日光

### ——若き詩人への啓示——

井 戸 桂 子

## Paul Claudel's Nikko Experience —the revelations of a young poet—

Keiko IDO

This essay deals with the experiences of the French diplomat Paul Claudel in Nikko.

In the midst of the holy mountains of Nikko in June 1898, a 29-year-old French diplomat recognized that all things in the universe are related and therefore he was ultimately motivated to become a poet. There are three reasons why he experienced these revelations in Nikko.

First, during his initial diplomatic stay in the U. S. from 1893 to 1895, Claudel was touched by the beauty and the power of nature and also became interested in the ability, the native Americans had, to live in harmony with nature.

Second, posted to China in July 1895, Claudel understood the relation between the earth and all life and began to write several prose poems which would be published under the title *Connaissance de l'est* or *Knowledge of the East*, which may also be translated as *Born Together in the East*.

Third, his visit to the Toshogu Shrine in Nikko revealed to him the meaning of the transformation of Tokugawa Ieyasu to godhood.

Finally came the moment of revelation. Wandering alone in the rainy mountains, he declared “je comprends la nature... je m'avance parmi le development de la doctrine” or “I understand nature... I advance in the development of the doctrine”. And he felt himself to be a participant in the divine scheme, saying “Je suis l'Inspecteur de la Création” or “I am the inspector of the Creation”.

Thus a 4-day stay in Nikko became one of the most important steps in creating his mythical world, which would be developed in his poetry and theatre.

はじめに

第1章 アメリカの自然

第2章 中国の大地

第3章 日光東照宮

第4章 日光の山中にて

おわりに

注

## はじめに

江戸幕末の開国以来、日光は、外国人の関心を引き続けている。西洋人としてはじめてこの霊山訪問を許可されたのは、英国公使パークス夫妻で、明治3年（1870年）4月のことである。その一行には、若き日の外交官アーネスト・サトウと日本学者バジルホール・チェンバレンも含まれていた。そのサトウが、明治8年（1875年）、外国人向けに日光の案内書 *A Guide-book to Nikko* を出版した。これは、日本で刊行された英語のガイドブックとして、京都案内（1873年）横浜案内（1874年）に続く、なんと三冊目のものであった<sup>注1)</sup>。日光に対する、外国人の高い関心を示唆するものと言えよう。

その後、日光へ向かう交通手段も、外国人向け宿泊所も徐々に整う。パークス公使一行が人力車で向かった道のりには、早くも明治5年（1872年）に千住一宇都宮間に鉄道馬車が通い、そして明治18年（1885年）には、上野一宇都宮間に待望の汽車が開通した。パークス一行は輪王寺本坊に宿泊したが、イギリス女性旅行家イザベラ・バードは明治11年（1878年）、村長で雅楽も職業とする金谷宅に十日ほど滞在する。バードによれば、金谷は「やる仕事はほとんどないので、自分の家と庭園を絶えず美しくするのが主な仕事」であり、「近頃、収入を補うために、これらの美しい部屋を紹介持参の外国人に貸し<sup>注2)</sup>」始めたところであった。金谷ホテルの始まりである。その後は避暑という滞在型の訪問客のために、輪王寺の僧房が貸し出される。例えば毎夏に避暑を楽しんだフェノロサは、禅智院やその隣の家に滞在する。

こうして日光は、外国人の間で「日光を見ずして結構というなかれ」と言いあうようになるほど、必ず訪問する地となっていく。フランス海軍士官ピエール・ロティは、明治18年（1885年）長崎にしばらく逗留したのち、秋の京都と

東京を周遊する。東京からさらに日光を訪れた時の小エッセイ、『日光霊山』の冒頭では、*Qui n'a pas vu Nikko, n'a pas le droit d'employer le mot "le splendide"* という、この格言のフランス語訳を引用している<sup>注3)</sup>。みな、当然のごとくに、日光を訪問するのである。

ロティ訪問の十三年後、明治31年（1898年）6月初め、フランスの文学者として後輩に当たる、三十歳目の青年が来日した。ポール・クロデル（Paul Claudel, 1868-1955）である。中国赴任中のこの若き副領事は、三週間の休暇旅行で、念願の日本訪問を果たした。先輩のロティと同様に、長崎に入港するが、すぐに横浜経由でこの日光を訪れ、東京、京都を巡ったのち、神戸から船で戻る。そして中国に帰任後、日本旅行を素材とした散文詩を数編残した。そのうち日光の思い出に基づくものは、二篇である。

クロデルは、二十三年後の大正10年（1921年）、再び日本を訪れる。フランス大使として数年間の赴任である。その間、関東大震災を体験し、大正天皇のご大葬に列席し、一方、代表作『繻子の靴』を完成させる。

本稿では、外国人を惹き付けてやまない日光で、この詩人が、何を体験したのか、その第一回の滞在を考察したい。第二回の滞在においても、日光で記念すべき講演を行ない、自然に触れている。しかし、その日本理解は大成した詩人外交官の眼差しであるので別の機会に譲ることにして、今回は若き日のクロデルに注目したい。なぜなら、日光を訪れることによって、初めて詩人が自分自身を成長させたからである。日光ならではの特有の体験が、彼の眼を開かせたことを明らかにしたい。

そのために本稿ではまず、二十歳代のクロデルの赴任先である、アメリカと中国での体験にも触れておきたい。

## 第1章 アメリカの自然

ポール・クロードルは、明治元年に当たる1868年、北フランスのエヌ県タルドノアに、登記所の役人を父として生まれる。十三歳のころ一家はパリに移るが、それは早熟な才能を見せていた姉カミーユの希望によるものといわれている。彼自身はパリでの生活になじめず、息苦しい青年時代を過ごす。ランボーの『イリュミナシオン』の影響を受け、文学に関心をもち、十九歳からマラルメを師とする。パリ大学法学部、続いて高等政治学専門学校に学び、1890年2月、二十一歳で外交官試験に首席で合格する。一見エリート官僚の典型的履歴であるが、そもそも外交官という職業を選んだのは、クロードルの場合、パリを、フランスを、西洋文明社会を脱出するためであった。

ゆえに、外務省商務部の見習いを経て三年半後、ようやく外国勤務になったときは、ほっとしたに違いない。行き先は憧れの東洋ではなく、ニューヨークであったが、とにかく1893年（明治26年）4月、二十四歳で副領事として渡米した。

そのアメリカ合衆国では、パリ以上に馴染めない生活が始まった。仕事に対しても、食事に対しても、不適應を示した。子爵である初老の領事のもとでの退屈極まりない時間。水っぽい農作物。飲み物は氷の入った水かレモネードで、大人まで度を越した甘いお菓子を食べる。身にまとうものは機械による大量生産品ばかり<sup>註4)</sup>。しかも経済的にも困窮していた。贅沢なブティックとホテルに誰でも出入りできるという民主主義国アメリカらしい環境なのに、給料からアパート代と食費を差し引けば行き詰ってしまう。その上、初めての外国暮しで、言葉もままならない。高校ではドイツ語を選び、英語はシェイクスピアで学んだという、いわくつきの英語力なのである。フラストレーションが溜まるはず

である。アメリカ生活に慣れてくるのは、ニューヨークからボストンへ転任し、ヴァイオリニストの友人を得てからである。そして早くも1895年2月には、母国へ戻る。二年に満たない第一回のアメリカ赴任であった。しかしこの不適應の環境を逆手にとって、アメリカ観察という勉強の場に持っていくのが、分析力にすぐれる努力家クロードルの強みである。

その結果が、戯曲 *Echange*（『交換』）である。男女二組のパートナー交換を意味する *Echange* では、二十代半ばのフランス人の見方で、しかも、経済を専門とする外交官とマラルメの弟子である詩人という二つの立場から、十九世紀末のアメリカ合衆国の本質を捉えようと試みる。インディアンの男性一人を含む男女二組四人の主人公が、カトリックで農耕文化の旧文明ヨーロッパと、プロテスタントで商業文化の新興アメリカ合衆国との対立を表す。また、自然を愛し呪術も操るインディアンと、機械とドルを信奉しエロスで誘惑するアメリカ人も対置させる。

そしてクロードルの日光体験という観点からこの戯曲を読むと、アメリカの自然とインディアンの不思議な力にクロードルが関心を持った点が注目される。ヨーロッパでは接することのできなかった雄大な自然と、アメリカで対面したことが、数年後に日光の山中で受けることになる啓示へとつながるからである。それでは、どのような自然と対面したのであろうか。

その自然とは、まず海である。太平洋を経て渡米するという長い船旅は、現代の航空機時代と違っていやがおうにも、大海原の世界を、すなわち、あふれるばかりの大量の水の世界を、詩人に印象付ける。そして二年間暮らす場所は、ニューヨークとボストンという河口の港町である。ニューヨークのフランス領事館は当時、河口に面しており、詩人副領事は、よく海に落ち

る夕陽を眺めたという。しかも気候的にも、アメリカ東部はフランス、ことにパリよりも、降雨量が多い。水に囲まれての環境である。*Echange* においてインディアン青年である主人公ルイ・レーヌは、海から全裸で上がって登場してくる。「頭からざんぷりと飛び込む。海だ！俺たち二人は互いをよく知っているし、好き合っている。俺にはまるで搾りたての牛乳の海だ<sup>注5)</sup>！」海に親近感を持つルイは、深い水底に棲み、水の冷たいさわやかさを堪能したいと願う。ときには蛙、魚、蛇に変身したいとまで言う。「魚のように（…）水底深く生きてみたい<sup>注6)</sup>」と。水を浴び、動物に変身する、というイメージは、それまでのクローデルにはなかったものである。

次にアメリカで接するのは、森林である。それも原生林といえるほどの森林である。故郷タルドノアでも、森と林を歩いたクローデルであるが、それはおだやかな農業国の中の丘陵の風景である。ここアメリカでは、自然に鋤が初めて入ってからまだ二百年余りである。マンハッタン島にかつてそよいでいた緑の叢林は、のちに「失われた時代」のアメリカ作家フィッツジェラルドが『偉大なるギャツビー』で惜しむように、十九世紀の間になぎ倒されてしまったが、少し郊外に出れば、深い森は残っていた。ことにクローデルは、ボストンへ移ってから、マサチューセッツの森を散策し憩いを覚えた。小動物もよく見かけたようで、フランスに帰ってから、クローデルが昆虫や動物の声のまねをしていることが友人によって記録されている<sup>注7)</sup>。そして *Echange* に於いて、女優レシーがルイを誘惑するのに使うイメージは、森林である。「おいで、自由になるのよ。（…）森を思い出してごらん。深い谷の底から霧が立ちこめ（…）きらめく暗い溪流を思い出すのよ<sup>注8)</sup>」と。

こうした実際の自然との接触のほかに、ホ

イットマンの詩集『草の葉』を読んだことや、インディアンについての雑誌記事から知識を得たことも確認されている。しかし、水の中に棲む動物への変身を想像することや、森林の小動物の声を真似ることなどは、読書から受ける自然のイメージだけでは到底なされない。やはり、アメリカで全身を包まれるように自然と接触したからこそ、フランスの都会っ子としての人生を歩んできたクローデルが、自然とそこに棲む動物への眼差しを開き始めたのである。

## 第2章 中国の大地

アメリカ勤務を終えたクローデルが、次の赴任先、中国の上海領事館に到着したのは、1895年（明治28年）7月、もうすぐ二十七歳になるときであった。折りしも同じ年の2月に、ゴーギャンが友人らに華々しく見送られて、太平洋のタヒチに旅立ったところであった。異動の合間に一時フランスに戻ったときでさえ疎外感を覚えた彼にとって、待望の東洋勤務である。

この勤務は、一時帰国をあわせてなんと十四年間の歳月に亘って、クローデルを中国と向き合わせた。その滞在時期は三期に分けられる。まず初めの四年三ヶ月に亘る上海時代は、散文詩集の題名そのままに、中国をはじめとした〔東方の認識〕をする日々であった。次に四年余りの福州時代では、戯曲『真昼に分かつ』の素材となる、V夫人との不倫恋愛を経験する。まさに、三十歳前半という人生の真昼のときを、苦悩のうちに過ごす。最後の三年三ヶ月の天津租界時代では、結婚して人生の午後を過ごし始め、創作活動も再び活発になった。この中国赴任は、二十七歳から四十一歳までの青年から壮年期に重なるが、中国および東洋に一番新鮮な印象をもって触れたのは、第一期であり、その時期に日本へも休暇として足を伸ばした。しかしその休暇をとるのは、中国赴任三年後のことなので、

この最初の三年間に中国で何を見たかを、知っておく必要がある。

ただし、中国とクロードルについて論じるのは、あまりにも長大になる。大地を耕作する農民への親近感。自然現象の分析。実証主義的な儒教への反発と、仏教への微妙な距離。一方、老荘思想の空無への理解。表意文字である漢字への関心。中国演劇との感銘的出会い、等々。ゆえに、ここでは本稿の関心事である、第一回の日本での体験につながるものに限ることにする。それは、アジアの自然の力を見て、そこに共に生きることを意味を知ることである。大地という自然現象を通して文化を見るという、クロードル独特の見方の始まりである。

クロードルはそもそも、西洋近代に対する反発から、外交官になり、東洋への赴任を期待した。ゴーギャンと同じく、近代文明から逃避し、自分自身へたどり着くことを願った。そして彼の場合、近代機械文明を排するのは、同時に、手作りの生活をする文明を良しとすることである。だから、中国で米作の農耕文明と出会い、その大地と農民は、特別の意味を持つこととなった。

ことに赴任した翌年の1896年（明治29年）に数ヶ月間、上海から福建省の港町、福州に派遣されると、アジアの自然との接触は本格化した。海路福州に入ったので、散文詩集 *Connaissance de l'est*（『東方の認識』）の中の詩 *Entrée*（『大地への入り口』）で強調している通り、この福州が、「大地のうちでも大地であるアジア<sup>#9)</sup>」を背後に控えていることを自覚した。そして、福建省の豊かな田園を目にして、穀物の黄金に輝く収穫の海原に感動する。さらには、福州を取り囲む山地一帯、ことに鼓山をとて気に入り。当時の外国人が盆地の福州の蒸し暑さから逃れた避暑の町、鼓嶺を拠点に、クロードルは山地を巡ったのである。そして山を巡りながら、眼

下を見下ろしては、大地が耕され、灌漑が施されていることを賛美する。詩 *Novembre*（『十一月』）にあるように、実りを生む大地に感銘を受ける。こうして、二十八歳の自らも成長期の青年は、アジアの大地を、生命を生み出す力を持つ自然として、理解し始める。そして、福州から海路上海に戻るとき、すなわち、揚子江という大河の河口の町に入るとき、詩 *Le Fleuve*（『大河』）にておいて、「大地の大地たるアジア大陸、すべての人間たちの母、中心にあり、ゆるぎなく、始原なるアジア<sup>#10)</sup>」と、謳った。ここで彼が見たのは、上海という町にとどまらない。その奥にゆったりときかのぼる大河、その大河を横たわらせる中国、その中国を含むアジア、大地の大地たるアジア大陸を、イメージさせる。実に雄大な空間である。

そしてこの雄大な空間を、母なる大地とならしめるのに欠かせないのが、農民である。現実には中国の農民が鋤をすき、水牛を使って耕すことなしに、また努力を重ねて灌漑を施すことなしには、実りも収穫もない。男性も女性も子供も、日がとつぷりと暮れるまで働く。それをつぶさに見ているクロードルが、彼らに対して共感を覚え礼賛するのは当然である。「谷あいの奥に、人間の炎が燃えているのを<sup>#11)</sup>」クロードルは知っている。

中国時代の成果である、散文詩集 *Connaissance de l'est* の *Connaissance* は、「知識、理解」という意味だけでなく、動詞 *co-naître* すなわち、「共に (co) 生まれる (naître)」から生じた名詞形 *connaissance* 「共に生まれること」をも、示唆している。そして、「東方という大地と共に生まれること」を、描く。実りは大地と共に、またそれを手助けする農民と共に、存在する。大地と農民と実りは分化できない。共生する。「東方を知る」ことは、「東方が大地と共に生まれる」ことを知ることである。こうしてこ

の散文詩集 *Connaissance de l'est* は、大地というアジアへの敬意と、それを耕すアジア人への親近感を出発点として生まれたのである。実に象徴的な詩集の題名である。

これは、詩人にとって大地がいかに大きな意味を持ったかを、示している。その国の文化を知るには、大地とそれを囲む自然現象すべてを、一言で言えば自然を、知らなければならない。

もちろん、日本の自然もその対象となる。自然の中に身を置き、自然現象を観察する。そして日本の文化の理解に発展させていく。ことに、数年間の滞在となった大使時代に、日本の自然と文化について深い考察がなされる。しかし、第一回目の滞在は三週間という短い休暇旅行に過ぎなかったにもかかわらず、日本の自然はもっと直裁に、二十九歳のクローデルの身を震わせる。自然の中に身を置く経験が、若い修行中の詩人に重要な意味をもたらしたのである。クローデルが身を置いた自然とは、日光であった。

### 第3章 日光東照宮

クローデルは中国に赴任してから三年間、上海を中心に、福州、漢口、蘇州といった中国国内の都市とその周辺を、外交官として訪問した。もちろん息抜きの休日もあったが、ようやく1898年(明治31年)、初めて国外へ足を伸ばして休暇旅行を楽しむことにした。それが、五月から六月にかけての三週間の日本訪問である。姉カミーユから聞き知った憧れの日本の土を、二十歳代の最後の日々に、踏むことになった。

滞在中の日記や書簡、あるいはルポルタージュがあれば、もうすぐ三十歳の感受性豊かな詩人が日本をどのように観察したかが、時系列で推測できる。しかし彼が残した主な記述は、*Connaissance de l'est* にまとめられる数編の散文詩と、*Art poétique* の中の一節である。見たままの生の感想というより、思索して高められ

た所産である。これらの散文詩から、日光体験を検討したい。

5月28日長崎に入港したクローデルは、早々に船を急がせ東に向かい、横浜に上陸する。横浜から鉄道を利用し、東京経由で宇都宮に降り立ち、6月1日には、日光に入る。毎月初めの祭礼に、間に合うように辿り着きたかったのである。もっとも、先を急ぎながらも、途中、横浜から東京へ向かう東海道線の車窓から松林と富士の高嶺を眼にして、それを題材に、散文詩 *Le Pin* (『松』) を書く。ここでは、松が、「大気の圧力」や「海風の力<sup>12)</sup>」とも戦い、曲がりくねりながらも、空に向かってそそり立つ人間のような力強さをもつ存在として、賞賛される。そして最後に、松のこずえが夕暮れの富士の嶺に重ねられて吸収されるという、遠望の風景によって終わる。松という植物を人間に例えて、神話の世界のような力強さを与えるのは、後年のクローデルに見られる〔宇宙樹〕にもつながる考察である。また、そこにある植物を、海沿いの土地という日本の自然条件から観察し、耐えて立つという人間性まで与えるのは、大地と文化を結び付けて考える、クローデル特有の見方の始まりとも言える。

こうして風景に目配りをしたのち、東京から汽車で宇都宮まで行き、そこからいよいよ日光に馬車に揺られながら向かう。中国で、蒸し暑い福州の街中から、しばしば岩山の中の町、鼓嶺を訪れ、周辺の山に足を伸ばしたクローデルである。さらには、山岳の寺院、永福の僧院に感銘を受けたクローデルである。ゆえに、東京在住の外国人に人気の避暑地であり、山の中に徳川家康の聖なる宮があると聞き知ったなら、日光への期待は高まっていたはずである。その折の思索が *Connaissance de l'est* に収められる散文詩 *L'Arche d'or dans la forêt* (『森の中の黄金の櫃』)<sup>13)</sup> に表わされる。

この散文詩 *L'Arche d'or dans la forêt* では、東照宮の舞台設定と黄金の櫃の、二つに観点が絞られる。まず東照宮の座する位置へのクロードルの観察である。それは、宇都宮からの道中に始まる。すなわち、だんだんと山岳地帯に分け入っていく過程と、杉の大並木の、訪れる人誰をも圧倒する力強さである。あのロティも感動した。まして鼓山を気に入っていたクロードルなら、この道中に興奮したはずである。クロードルは“Spectateur” すなわち「観客」として、迫り来る日光山全体にも、「切りとおしの斜面の地層」にも、つぶさに眼をやる。「奥深くにある暗い森と重厚な山嶺」も、折からの下り坂の天候による「暗雲」も、東照宮の舞台設定にふさわしい。こうしてこの山奥全体は、「黒々とした虚無の底」と「照応する。」暗黒の野性的な自然が、それを超えた神話世界と呼応する。眼前の自然界が、宇宙的な広がりを見せ始める。そして、「杉の森 (*forêt*)こそが、じつは、神殿だ」と断言する。その神殿の中で、何を発見するのであろうか。

そんな道中を経て日光に到着した翌日、東照宮へ参拝する。暗黒の森とは一転して、形も色も賑やかになり、最後は黄金の魔術を発見する。

まず、「朱色のトリイ (鳥居)」をくぐり、「浄めの水」で口をすすぐと、陽明門である。「夢の扉のように、花々と鳥たちの飛び交う」門をくぐる。そして「裸足になって、黄金の中心に、深く入る。」神官の朝の執行と「黄金の房を」手にする神楽を観て、いよいよ内陣の霊の場に臨む。

ここでクロードルは考察する。中国建築が遊牧民の天幕を支柱で支える発想であるのに対し、海洋民族の子孫による日本建築は、船室を大きくした「箱」であるから、屋根は「蓋」に過ぎない。だから、この家康の内陣も、「箱」である。ここでクロードルが発想するのが、*L'Arche*

「櫃」である。暗黒の森に浮かぶ、[ノアの箱舟] (フランス語では *L'Arche de Noé*) である。家康が神となる「聖なる箱」である。

しかも金色 (*d'or*) である。「これらの宮殿はすべて金色の色彩から立ち現れる。」そして内陣の内部に入れば、「櫃の六つの内壁が、同じく秘宝 (*trésor occulte*) の輝きに彩られる。」「幾つもの不変の鏡に映し出される不在の炎」で黄金に輝くのである。厳しい自然の森という舞台設定に現れる、金色の神話的空間である。そのコントラストは見事である。

それが、この詩の題名の *L'Arche d'or dans la forêt* である。彫刻・絵画という職人芸を極め、黄金を施した、人工の極致である「黄金の櫃」であると同時に、*occulte* という表現を使うことから分かるように、人知の及ばぬ神秘性と魔術性を秘めた「黄金の櫃」である。ゆえに、死者が神に変身し、人が神に昇華する空間となるのである。

ところで、日光とは、そもそも八世紀に勝道上人が利根川の氾濫を治めるために二つの荒れる山、男体山と女峰山を登頂して開山し、二荒山 (ふたらさん) 神社を開いたことに始まる。ゆえに、古くは、この地を二荒 (にっこう) とも記した。そして近世に入って、南光坊天海の助言の下、家康が江戸の鎮守としてこの地を選ぶ。風水学の見方からも、「北に山があり玄武」といって、江戸という都市の北に山があつて宮を置くのがよいとされている。かねて山岳仏教の本拠地であつたこの地が、さらに徳川の命運を賭けた、聖なる神宮の意味を持つことになる。家康が東照大権現になる宮となる。ここから東照宮が始まる。そして徳川の威信をかけて、山を拓き大神宮を造営し、さらには内部外部の装飾を施した。しかし意外なことに、この建築に携わった匠たちは、京都の桂離宮も造営してい

た。たとえば狩野探幽、尚信や、大棟梁甲良豊後や、家光の側近の武将、小堀遠州らは、双方の造営に携わった。ただ当代第一級の匠たちが励んだ対象が、斜陽の宮廷親王家の私的な別荘であるか、あるいは、日昇る勢いの幕府の公的な神宮であるかだけの違いであった。ゆえに、後者の注文には、担当者は、徳川の隆盛に圧されて、その力をあらん限り、集中させた。神と交流する壮大な宇宙空間と、人間が神となる人知を超えた人工空間を、作り上げなければならなかった。森林全体を敷地とし、内陣へのアプローチやその内部も、人を圧倒するほどの工夫を施さねばならなかった。すると東照宮に、この時ならではの迫力が出来たのも、当然である。

この迫力を、クローデルは受け止めた。大造営を、「杉の森こそが、じつは、神殿だ」と見抜き、家康が東照大権現へと変身する内陣が、「不在の炎」でゆらめき「秘宝の輝きで彩られる」のを発見した。『森の中の黄金の櫃』という、象徴的な題そのままに、クローデルは徳川の意図を理解した。

ではなぜ二十九歳の、初めて日本を訪れるフランスの青年に、それができたのであろうか。それは、彼の鋭い観察と柔軟な思索の賜物ではあるが、これまでの経験も生きている。すなわち、アメリカの大自然とインディアンの呪術的な力を知り、その相関関係に魅力を感じていた若者なら、大自然を神殿とし人が神となる業に対して、違和感は少なかったであろう。また、日本は火山国であり、日本人は海洋民族の子孫であるという観察から、[暗闇の深山に浮かぶ箱舟] という大胆な発想を、東照宮に仕掛けることが出来たのも、クローデルが中国で、大地を観察することでその国の文化を見て取る事に気付き始めたからである。そして、人工の極致といえる東照宮の迫力を、人が神へと変身するた

めに必要なエネルギーであると理解できた背景には、鼓山の奥にある永福の岩窟寺院で、僧たちが祈る魔術的空間を見知って『冥想する人』という散文詩を既に見知っていた事実もある。

逆に言えば、アメリカと中国を経て、ここ日光で、自然という大きな舞台装置と、人工の極みの迫力を持ってして初めて、総合的な神話的空間ができることを、クローデルは目の当たりにした。大地と人と神とを共生させる一大神話的世界を、日光に見た。クローデルは意識しなくとも、まさに、東照宮によって自然と江戸とを鎮守させようという、南光坊天海の魔界を見た。劇作家クローデルの第一歩となる啓示である。

#### 第4章 日光の山中にて

日光東照宮を参拝した翌日のことである。6月4日という日付から推察すると、梅雨前線が停滞したのであろう。日光の山中は激しい雨に見舞われた。それでも午後、クローデルは、日光の町から中禅寺に向かい始めた。しかも街道から外れて、かなりの上り道を一人進んだ。途中すれ違う村の女性たちが、おかしい外人だと彼を見ていたが、そんな人々にも会わなくなるぐらいまで山の中に入りこんだ。しかし結局、豪雨のため果たせず、引き返した。敷物の上を歩くと靴から泥水が出て気恥ずかしいほどのずぶ濡れになって、金谷ホテルに帰還した。

しかし、その心は満たされ、興奮していた筈である。この散歩で、クローデルは詩人としてのさらなる啓示を得たからである。日光の山中で、自然との共生に自ら参加し、さらに、自然界の存在同士を共に生きさせる「検査官」としての自信を得たのである。それは、散文詩 *Le Promeneur* (『散策者』)<sup>註14)</sup> に表わされる。

クローデルは「節くれだった杖を手に、ビシ



ャモンの神（毘沙門天）さながらに、（…）目的も利益もなく」夕闇迫り、嵐をはらんだ空の下、一人新緑の山の中をさ迷い歩く。毘沙門天という神になぞらえることで、これからの散策が、日常を離れた神秘的空間になることを予感させる書き出しである。その散策者が森の中に迷い込んで見聞するのは、椿の葉から落下したしずくと、つややかに光る苔との、打ち明け話である。水滴が苔と密やかな話をする。それに驚いた「世慣れぬ山羊の私は」逃げ出し、「木々や花々のようにひっそりと立ち止まって」、遠いこだまに耳をそばだてる。雨の合間に交わされる、小鳥たちのさえずりを楽しむ。散策者は、もはや普通の人間ではない。山羊に譬えてはいるが、森の小動物の一つとなる。メルヘンのように、鳥や小動物の言葉はもちろんのこと、植物や水滴の想いまで分かる。あるいは、少年クロードルが感銘を受けたランボーの『イルミネナシオン』において、『洪水の後』に登場する、兎になっているともいえる。

こうしてクロードルは、現実として、山の森の中で、万物の交感するのを体験する。見て、聞いて、湿りのある大気を共有し、森の芳香をかぐ。そして発見する。「どの木にも個性があり、どんな小さな獣にも役割がある」ことを。そして宣言する。私は「音楽を理解したように、自然を理解する」と。

しかしこの若者は、生き物として自然界に同化し、自然を理解したことだけでは満足しない。万物共生の歓びに打ち震えるだけではない。更なる高次元へ到達する。生き物同士のつながりを、すなわち、「ひそやかな親近性を証明し、始原にあった計画を再構築する」ことに目覚める。自然を理解した自分は、自然を見つめることによって、自然界の生き物同士をつなぎ合わせることが出来る考える。万物の調和を図るのである。数年後、*Art poétique*（『詩の原理』）の一

節で次のように振り返る。「かつて日本で、日光から中禅寺へと登っていったとき、私が見たものは、楓の緑が松の木の差し出す調和を満たす姿であった。楓と松は互いに遠く隔てられていても、私の眼差しによって、一直線に併置され<sup>註15)</sup>」たことに気がついたのである。「二つの相異なるものが、同時に結ばれて現存するという事実を<sup>註15)</sup>」確認した。ここに、楓と松とを見つめた私は、「現存する事物の確認者<sup>註14)</sup>」という特命を帯びた人物となる。散策者から、「検査官<sup>註14)</sup>」となる。自分の眼差しによって、生き物同士を調和させる。神の創造の摂理を助ける詩人へと変身する。象徴詩の師、マラルメが目指した精緻な秩序を手にし、カトリックの信仰者としても神を助けられる、なんと力強い詩人への飛躍であろう。この啓示は、詩人クロードルの根本となる。

しかし、なぜここ日光で、その啓示を得ることが出来たのであろうか。なぜ、ランボーとマラルメを輩出したフランスの母国でなく、カトリックの国とは縁遠い、東照宮の山中なのであろうか。単に自然というだけの要因なら、アメリカのマサチューセッツの森や中国の鼓山のなかでも、啓示を受けられたのではないか。

それは、アメリカと中国を経た上での、東照宮であったからである。

まず、自らを「山羊」に例えて森の中に潜ませた過程を、考えたい。確かに、心酔したランボーの「兎」のイメージと重なる。アメリカから帰国した詩人が、大自然の小動物の鳴き声を真似ていたという証言も伝わる。しかし、「山羊」が、椿の小枝から滴り落ちた「しずく」と、つやつやと光る緑の「苔」とが話をするのに驚いたり、「小鳥」のさえずりに耳をそばだてたりするのは、動植物が、あらゆる生き物が、一体となっているさまである。花と葉と、枝と幹と苔

と、鳥と小動物と、そして湿潤な大気すべてが、一体となっている。それほどの〔万物の群がり〕を表現するのは、実は、実際の自然だけではない。彼が昨日訪れたばかりの、東照宮である。そのあふれんばかりの彫刻、絵画、色彩の乱舞である。想像の生き物までをも含めた万物に、東照宮は囲まれているのである。それを見たあとのクローデルなら、翌日に実際の森に解放された時、自分が小動物に変身し、万物の生き物の一員となるのはたやすい。

さらに、このたっぷりの自然の中に解放された際にも、アメリカや中国に於ける自然とは違った趣がある。確かに豪雨の一日であったから、アメリカで経験した海や雨への親近感がよみがえり、とっぴりと水に浸る水感覚や、生命の源に触れる喜びがあったであろう。さらに、山を巡る楽しさを、鼓山にもなぞらえて満喫したかもしれない。しかし、ここの自然は、単に雨の山というだけではない。聖なる山である。山全体が神殿となる、東照宮の聖なる山である。その上、東照宮だけでなく、民間信仰により、山や大木や石が、神として祀られている土地である。自然が崇められている場所である。その只中に、入り込んだのである。

そうなれば、クローデルが、「毘沙門天」となり、詩人として宇宙の「検査官」となるのは、当然の成り行きである。しかも、曲がりくねった木の杖を持ち、自らを毘沙門になぞらえるのは、明らかに、彼がこの神の意味を知っていることである。つまり、毘沙門天は、四天王の一人で、山の中腹北方に住し、片手に宝塔、片手に宝棒を持つといわれる。すなわち、江戸の北方世界を守護し、財宝を守る神である。クローデル自らも、木の杖を宝棒の代わりに持って山の中腹を歩き回り、毘沙門天や家康のように、自然の宝を見守るのである。神の天地創造の摂理を助ける「検査官」となるのである。それが、カ

トリックの詩人としては精一杯の、またそれで十分な、神への変身の業であった。

こうして、東照宮の影響のもと、現実が聖的空間となり、詩人としての自信を得たのであった。若き詩人クローデルへの、日光での啓示であった。

### おわりに

日光での数日を経た後、クローデルは東京に戻り、東海道経由で京都を訪ね、神戸から船で九州に入り、再び上海に戻る。この外交官はその後十年間中国に駐在し続けるが、たとえ休暇でもその間に日本を訪れることはなかった。私的人生の山場となる、V夫人との恋愛があったからともいえよう。

しかし、詩人の魂に触れたとも言うべき深い体験を、日光が三十歳直前のクローデルに与えたことは、クローデルにとって、幸いなことであった。まさに、詩の題名そのままに、『森の中の黄金の櫃』である東照宮を参拝したからこそ、その翌日の『散策者』は、真の詩人となったのであるから。

クローデルがこの〔森〕を再び〔散策〕するのは、二十三年後のことである。フランスの駐日大使として、日仏両国の期待の高まる中、赴任する。そしてその公務と喧騒の東京から遠ざかるために好んで訪れたのが、ここ日光であった。若き日の体験なしには、彼がここを逃避地とはしなかったであろう。日光は、彼を再び、その懷に抱いたのである。

### 注

- 1) 横浜開港資料館編『世界漫遊家たちのニッポン』（横浜開港資料普及会、1996年）27頁。
- 2) Isabella L. Bird, *Unbeaten Tracks in Japan* (Vermont & Tokyo, Charles Tuttle Company, 1990) p. 53.

- 3) Pierre Loti, *La Sainte montagne de Nikko, Japoneries d'automne*, (Paris, Calmann-Levy, 1921) p. 154.
- 4) これらの記述は、戯曲『乙女ヴィオレーヌ』の中での、アメリカを旅行したフランス人の感想に拠る。Paul Claudel, *Violène, Œuvres théâtre I*, (Gallimard, 1967) pp. 643-644.
- 5) Paul Claudel, *Echange, Œuvres théâtre I*, (Gallimard, 1967) p. 660. 本稿で取り上げるすべてのクロードル作品は一部の部分訳しか邦訳がなく、本稿中は拙訳である。
- 6) *Ibid.*, p. 664.
- 7) 渡辺守章『ポール・クロードル——劇的想像力の世界』(中央公論社 昭和50年) 371頁。本稿の伝記的記述は同書に仰ぐところがある。
- 8) *Echange, Œuvres théâtre I*, (Gallimard, 1967) p. 696.
- 9) Paul Claudel, *L'Entrée de la terre, Connaissance de l'est, Œuvre poétique*, (Gallimard, 1967), p. 45.
- 10) Paul Claudel, *Le Fleuve, Connaissance de l'est, Œuvre poétique*, (Gallimard, 1967), p. 62.
- 11) Paul Claudel, *Novembre, Connaissance de l'est, Œuvre poétique*, (Gallimard, 1967), p. 55.
- 12) Paul Claudel, *Le Pin, Connaissance de l'est, Œuvre poétique*, (Gallimard, 1967), p. 79-81.
- 13) Paul Claudel, *L'Arche d'or dans la forêt, Connaissance de l'est, Œuvre poétique*, (Gallimard, 1967), p. 81-84. 以下の引用「 」は、この散文詩より。
- 14) Paul Claudel, *Le Promeneur, Connaissance de l'est, Œuvre poétique*, (Gallimard, 1967), p. 84-85. 以下の引用「 」は、この散文詩より。
- 15) Paul Claudel, *Art poétique, Œuvre poétique*, (Gallimard, 1967), p. 143